

## 双胎妊娠 1 児死亡例の検討

牧野 康男 牧野 郁子 川上 剛史  
永川健太郎 讃井 絢子 瓦林達比古

福岡大学医学部産婦人科学教室

**要約**：1987年1月から2002年12月までの16年間に、当院において経験した妊娠22週以降の双胎1児胎児死亡8例における生存児の予後について報告する。

膜性診断の結果は1絨毛膜性双胎5例、2絨毛膜性双胎3例であり、分娩様式は1例を除いて7例が帝王切開であった。双胎1児胎内死亡確認から出生までは平均 $23.5 \pm 14.8$ 日(0-122日)、生存児の平均出生体重は $1,911.4 \pm 236.0$ g(1,325-3,366g)で、平均分娩週数は $33.0 \pm 1.1$ 週(28-38週)であった。早産の割合は、妊娠20週で子宮内胎児死亡後に妊娠38週で前回帝王切開の適応で分娩となった1例を除いて、8例中7例(87.5%)が早産であった。

生存児8例の予後において、5例(63%)が正常で、2例(25%)が脳室周囲白質軟化症を合併し、神経学的予後も不良であった。残りの1例は1絨毛膜性双胎で妊娠32週で帝王切開により、Apgar score 6点(5分)、1,620gで分娩したが、心筋肥大並びに心機能低下にて生後14日目に死亡した。

**索引用語**：双胎、子宮内胎児死亡、脳性麻痺